

中国の軍事力近代化、海洋活動について

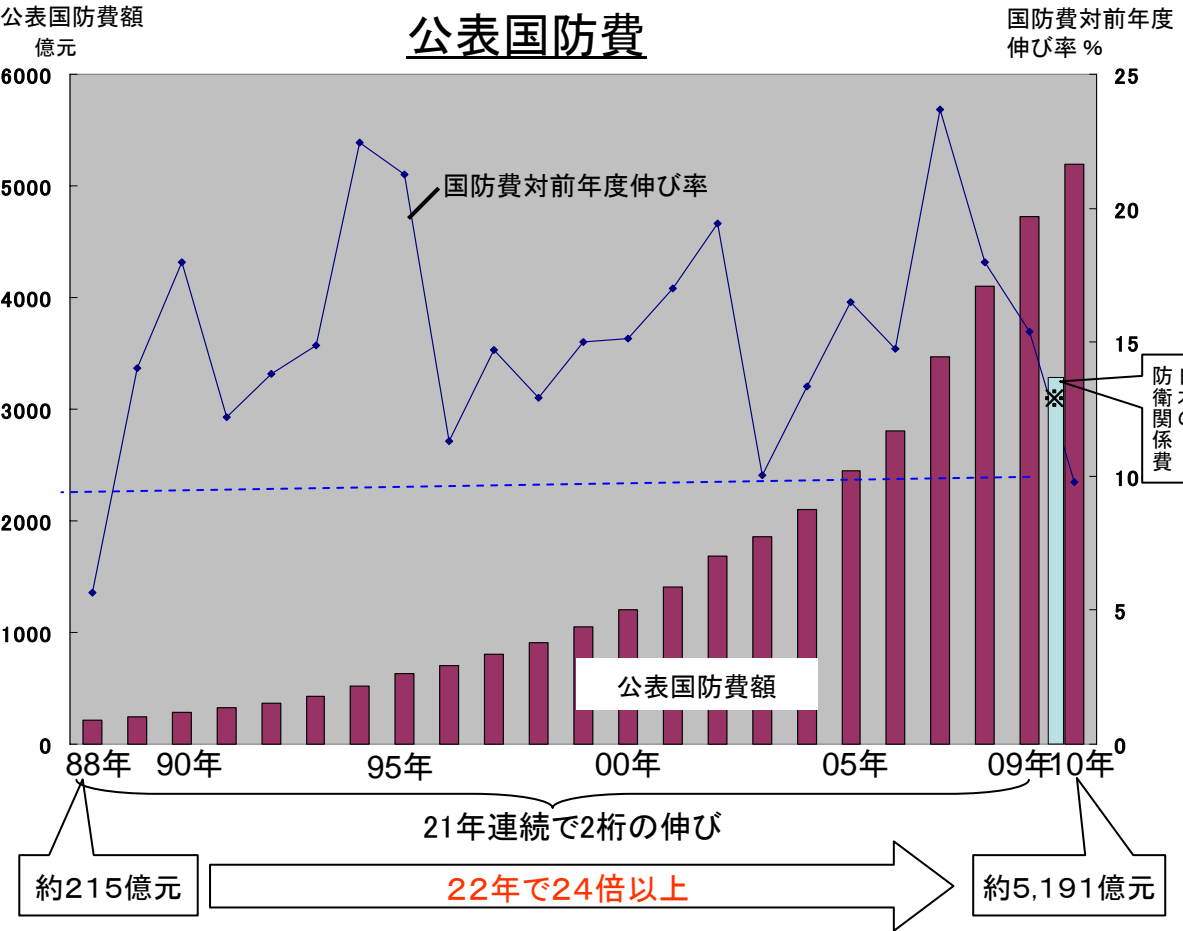
平成 22 年 4 月
防 衛 省

〔目 次〕

国防費	1
中国の国防費に対する見方	2
軍事力近代化の方向性	3
陸軍の近代化	4
海軍の近代化	5
空母保有に関する動向	6
空軍の近代化	7
核・弾道ミサイル戦力の近代化	8
対衛星兵器の実験	9
ミサイル迎撃実験	10
我が国近海などにおける活動の例	11
ソマリア周辺海域における船舶護衛活動	12
中国の軍事力及び海洋における活動に対する評価	13
中国の軍事力の現状と将来に対する各国の見方	14

国防費

国防費増加についての中国の説明



- 中国政府は、2010年度の中国の国防費を 5,190億8,200万元と発表 (対前年度当初予算比9.8%の伸び)
- 1元=14円で換算すると、約7兆2,671億円
- 日本の平成22年度予算案における防衛関係費は、約4兆6,826億円※ (SACO関係経費及び米軍再編関係経費のうち地元負担軽減分は除く。)

(1) 国防費の伸び

- 国防費の増加は、国防の必要と国民経済の発展レベルにふさわしいものであるとの原則に依拠している、と説明。
- 1978年以降の30年間で3つの時期(78～87年、88～97年、98年～07年)に区分し、各時期における、国防費、GDPおよび国家財政支出の年平均伸び率等を用いて、

- ① 近年の国防費の増大が過去の資源配分の遅れを取り戻すものであること、
- ② 近年においても、国家財政支出の伸びに比べれば国防費の増大が抑制されたものであること、

の説明を試みている。

時期		78～87年	88～97年	98～07年
年平均伸び率	国防費	3.5%	14.5%	15.9%
	GDP	14.1%	20.7%	12.5%
	財政支出	10.4%	15.1%	18.4%

(国防白書の記述を表にまとめたもの)

(2) 過去2年間の国防費増額の理由

- 将兵の待遇改善
- 物価上昇への対応
- 軍事変革の推進

(「2008年中国の国防」による。)

中国の国防費に対する見方

- 中国の実際の国防関係費の内訳やその額については、中国の予算制度等が明らかでないこともあり、確たる見積もりを行うことは困難であるが、以下のような見方がある。

米国防省「中国の軍事力に関する年次報告」(09年3月)

- ・ 2008年の中国の公表国防費約600億ドルに対して、実際の軍事関連支出の総額は1050億～1500億ドル(※公表国防費の1.75～2.50倍)と見積もられる。
- ・ 中国の公表国防費は、重要な支出項目を含んでいない。

ストックホルム国際平和研究所「2009年版年鑑」(09年6月)

- ・ 2008年の中国の公表国防費4180億元に対して、国防支出は5900億元(=849億ドル)(※公表国防費の約1.41倍)と見積もられる。(仏を抜いて初めて世界第2位)
- ・ 中国の公表国防費は、装備品輸入を含む重要費目を含んでいない。

台湾国防部「国防報告書」(09年10月)

- ・ 公表国防費だけでは、軍部隊の日常活動を維持するにも不十分。
- ・ 中国の主張どおりに、装備・施設の拡充や防衛作戦能力の向上等に予算を投入しているとすれば、より膨大な予算が必要となるはず。
- ・ 軍事目的の特別案件、重要項目、国防工業集団の運営のための支出等は国防費とは別会計。未公開項目、技術移転等も計上されず。

軍事力近代化の方向性

基本方針

世界の軍事技術発展の趨勢(湾岸戦争、コソボ紛争、イラク戦争)に対応し、
軍事力のハイテク化、情報化を推進

「中国の特色ある軍事変革」を推進(急速な近代化)

陸軍

区域防衛型
⇒全域機動型

海軍

近海で洋上戦闘を行う
総合戦闘力向上
核反撃能力向上

空軍

国土防空型
⇒攻防兼備型

第二砲兵

戦略抑止・通常打撃力向上

- ◆ 中国は**軍事目的での宇宙利用**を行っている可能性があり、**対衛星兵器の開発**も行っている。
- ◆ 中国は**サイバー戦の専門部隊**を編成し、訓練を行っているとみられている。

「**5次元空間**」が
将来の情報化戦争の主体
(陸、海、空 + 宇宙、電磁)

陸軍の近代化

陸軍近代化方針

- 区域防衛型から全域機動型に転換
- 規模を合理的に縮小し、体制・編制を改革
- 部隊編成を小型化、モジュール化、多機能化の方向へ発展
- 空地一体、長距離機動、迅速な突撃、特殊作戦能力の向上

(「2008年中国の国防」)

陸軍近代化の主な内容

- 兵員の削減と装備の近代化
- 全域機動型への転換のための改編(快速反応部隊の整備等)
- 自動車化、機械化、ヘリ導入等による機動力の向上
- 後方支援能力の向上



99式戦車

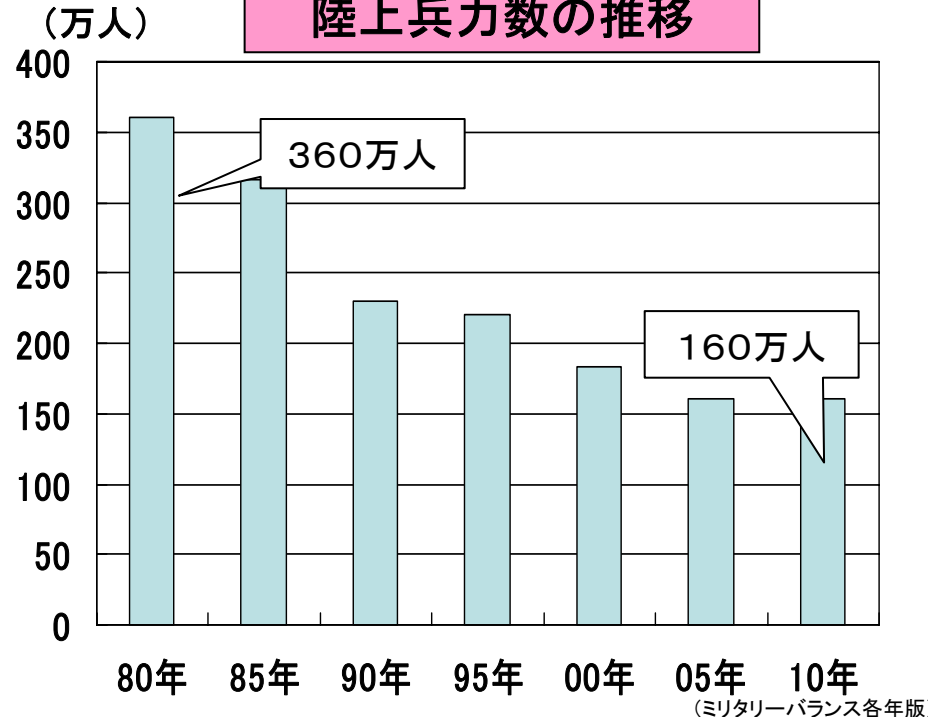


05式水陸両用歩兵戦闘車



WZ-9攻撃ヘリコプター

陸上兵力数の推移



※削減された人員の一部は人民武装警察に編入されたとみられる。4

海軍の近代化

海軍近代化方針

- 情報化を建設の発展方向および戦略重点として堅持し、強大な海軍を建設
 - 近海で洋上戦闘を行う総合戦闘力を向上
 - 核反撃能力を向上
- (「2008年中国の国防」)

- より遠方の海域において作戦を遂行する能力の構築
- 水上艦艇、潜水艦、揚陸艦など海軍戦力全体の能力向上
- 戦略ミサイル原潜の更新

水上艦艇の近代化

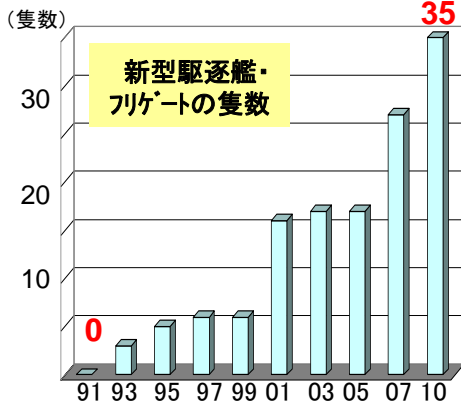
潜水艦戦力の近代化

外洋作戦能力の向上
 - 駆逐艦、フリゲートの増強
 - 洋上補給艦の整備

揚陸能力の向上
 - 揚陸艦艇の増強

通常動力型潜水艦の増強
 - キロ級の輸入
 - ソン級・ユアン級の開発・生産

新型原潜の開発・生産
 - ジン級SSBN、シャン級SSNの開発・生産



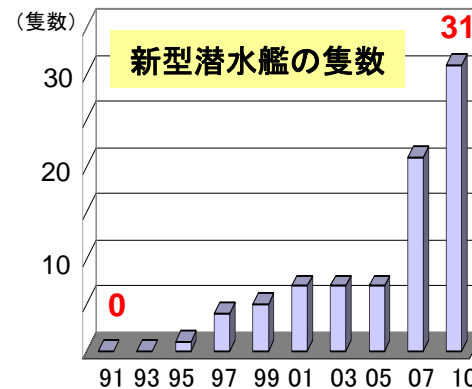
ソブレンヌイ級DDG

排水量: 7,940t(満載)
 初就役: 1999年
 備考: ロシアから4隻購入。SS-N-22超音速対艦ミサイル(射程160km)を装備。



ルージョウ級DDG

排水量: 7,000t(満載)
 初就役: 2006年
 備考: ロシア製のSA-N-20長距離SAM(射程:150km)とフェーストアレイレーダーを装備。



キロ級SS

排水量: 2,325t(水上)、3,076t(潜没)
 初就役: 1995年
 備考: ロシアから12隻購入。静粛性に優れる。5番艦以降は巡航ミサイルSS-N-27(射程180km)を装備。



ジン級SSBN

排水量: 8,000t
 初就役: 2007年
 備考: 開発中の新型SLBMのJL-2(射程8,000km以上)を搭載するとみられる。

※ ジン・シャン・ソン・ユアン・キロの各級潜水艦の総隻数

※ ルフ・ルーハイ・ソブレンヌイ・ルーヤン・ルージョウの各級駆逐艦及びジャンウェイ・ジャンカイの各級フリゲートの総隻数

空母保有に関する動向

中古空母の購入等

- 1986年 英国製空母「メルボルン」を豪州より購入、技術調査の後に鉄くずとして解体
- 1998年 旧ソ連製空母「ミンスク」を購入、広東省深セン市でテーマパークとして展示
- 2000年 旧ソ連製空母「キエフ」を購入、天津市でテーマパークとして展示
- 2000年 旧ソ連製の未完成の空母「ワリヤーク」を購入、大連において塗装の変更などの改修を実施
- 2009年4月 「ワリヤーク」が大連港の大型ドックに入渠、改修を実施
- 2010年3月 「ワリヤーク」が出渠



大連港のドックに入渠中の「ワリヤーク」

艦載機、訓練施設等

- 07年 7月 ウクライナからT-10K艦載用実験機を購入したとの情報（加民間軍事研究機関）
- 07年8月 海軍内に空母建造のための専門組織が発足との報道（共同通信）
- 08年9月 海軍大連艦艇学院においてパイロット要員に対する艦載機の飛行専門教育を開始
同月 中国軍関係者がウクライナの艦載機訓練施設を頻繁に訪問しているとの情報（加民間軍事研究機関）
- 08年12月 中露軍事技術協力合同政府間委員会においてSu-33艦上戦闘機の売却について協議との報道（露紙）
- 09年 5月 中国が2007年にウクライナから空母着艦用練習機であるSu-25UTGを輸入したとの報道（マレーシア誌）
- 09年10月 武漢市の中国艦船設計研究センターに実物大の空母模型が建造されているとの報道（中国紙）



武漢で建設中の空母を模した建造物

最近の要人発言

- 08年11月 「いかなる大国の海軍も空母を保有する夢を持っている」 銭利華（国防部外事弁公室主任・少将）
- 08年12月 （空母建造について）「関係する問題を真剣に研究・考慮する」 黄雪平（国防部報道官・上級大佐）
- 09年 3月 「空母を永遠に持たないわけにはいかない」 梁光烈（国防部長・上将）
- 09年11月 「経済発展、建造のレベル、安全の要素といった諸要素を総合的に勘案した上で空母保有について決定する」 梁光烈（国防部長・上将）

空母保有のための技術の研究・開発を推進

空軍の近代化

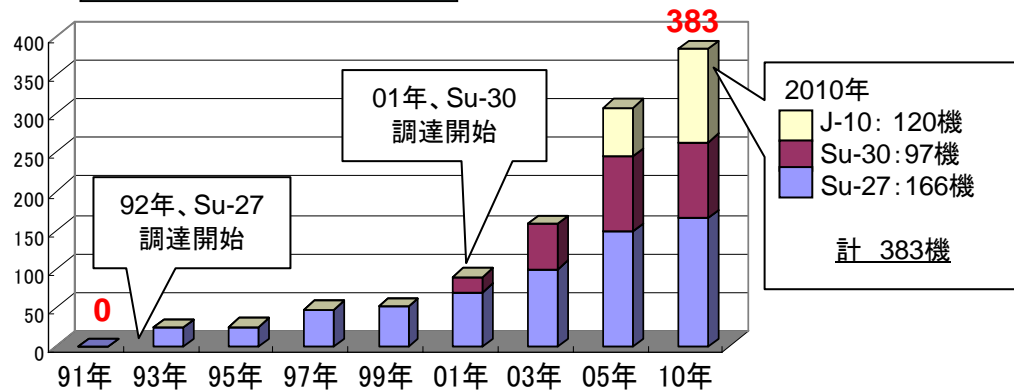
中国空軍の近代化方針

- 国土防空型から攻防兼備型に転換
- 偵察及び早期警戒、空中打撃、航空・ミサイル攻撃への防衛、戦略的投射能力を向上させる
- 現代化された戦略空軍を建設

(「2008年中国の国防」)

- 陸軍作戦支援及び国土防空作戦のみを実施可能な空軍から、C4ISRを重視した近代化された装備品を有し、より効果的な防空作戦と遠距離で敵の策源地を攻撃可能な空軍への転換を指向
- 制空戦闘、空対地攻撃、航空・ミサイル攻撃への防衛能力、早期警戒、偵察、空輸能力の強化を重視

第4世代戦闘機数推移



新型戦闘機が
着実に増加



J-10戦闘機

(ミリタリーバランス各年版)

核・弾道ミサイル戦力の近代化

近代化方針

第二砲兵

- 武器・装備品の情報化水準を向上
- 安全性および信頼性を確保
- 防護能力、即応能力、防御突破能力、破壊力および精密打撃能力を強化

海軍

- 戦略抑止・反撃能力の全面的向上

(「2008年中国の国防」)

核・弾道ミサイル戦力の近代化努力

即応性・残存性の向上

- 液体燃料から固体燃料化
⇒液体燃料よりも小型で車載化しやすく即時発射可
- 固定式から車載化(移動式化)
⇒発見・破壊されにくく、任意地点で発射可能
- 新型SLBMと新型SSBNの開発
⇒残存性の高い戦略核戦力

打撃力の向上

- 弾頭の小型化、複数化、個別誘導多弾頭(MIRV)化
⇒同時複数目標攻撃が可能に。ミサイル防衛に対抗
- 誘導制御技術の導入
⇒精度の高い攻撃が可能に

弾道ミサイルの種類・性能

種類	大陸間弾道ミサイル		中距離弾道ミサイル			短距離弾道ミサイル		潜水艦発射弾道ミサイル	
	DF-5 シリーズ	DF-31 シリーズ	DF-4	DF-3 シリーズ	DF-21 シリーズ	DF-15 シリーズ	DF-11 シリーズ	JL-1 シリーズ	JL-2
推進方式	液体燃料	固体燃料	液体燃料	液体燃料	固体燃料	固体燃料	固体燃料	固体燃料	固体燃料
射程(km)	12,000 ~13,000	8,000 ~14,000	4,750	2,650 ~2,800	1,700 ~2,500	600	280~530	2,150 ~2,500	8,000
基数	20	~20	15-20	15-20	60-80	350-400	700-750	—	—



DF-31A大陸間弾道ミサイル



DF-21C中距離弾道ミサイル

(ジェーン年鑑、米国防省「中華人民共和国の軍事力に関する年次報告」2009年版)

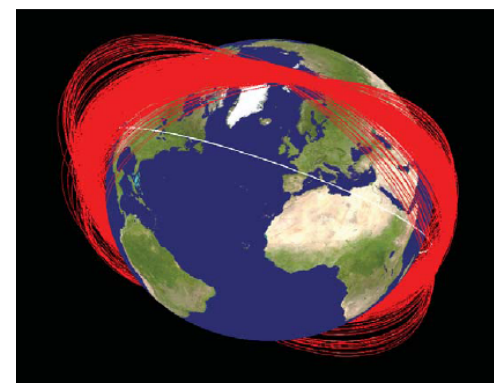
対衛星兵器の実験

実験の実施

○ 07年1月12日 中国が実験を実施

- ・ 中国が、老朽化した自国の気象衛星「風雲-1C」(翼幅8.6m)を、対衛星兵器の直撃により、高度864kmで破壊する実験を実施。
- ・ 対衛星兵器は、四川省の西昌発射基地又はその付近の発射台付き車両(TEL)から発射されたと見られる。
- ・ 使用されたミサイルは、陸上発射型中距離弾道ミサイル(米国の情報当局者による議会証言では「SC-19」)で、キネティック弾頭(直撃弾頭)が用いられたとみられる。
- ・ ミサイルは346度(真北から西に約14度の方向)の角度で発射し、衛星への衝突時は非常に高速。標的衛星は南に向かって飛翔。
- ・ 実験により、4インチ四方以上のデブリが950個以上と小片が数千個発生した模様。衛星軌道に衛星軌道に多くのデブリが残存し、20年以上、宇宙資産への脅威になるとみられている。

(米政府発表、米国議会調査局報告書、Aviation Week & Space Technology等)



中国ASATIにより生じた風雲-1Cのデブリ(一月経過)
白線は国際宇宙ステーション軌道(NASA)

中国の発表

○ 中国外務省報道官(07年1月23日)

「中国は宇宙で実験を行い、関係方面に連絡した。」

「中国は、宇宙空間の軍事化や軍拡競争に反対するという立場に変化は無い。今回の実験はいかなる国も対象にしておらず、脅威にもならない。」

中国の対衛星攻撃能力に関する米国防省の見解

- ・ 中国にとって宇宙活動及び能力は、台湾海峡危機に際する接近阻止・地域拒否及びこれを超えた重要性を持ち、宇宙及び対宇宙の能力を、国家の威信の向上や、世界大国としての象徴とみなしている。
- ・ 中国が2007年1月に実験した直昇型対衛星兵器は、敵の宇宙利用を制限または妨げるための多面的な計画の一部である。中国は、衛星通信の妨害装置を入手したほか、レーザーや電波による対衛星兵器の技術を開発している。

(米国防省「中華人民共和国の軍事力に関する年次報告」2009年版)

ミサイル迎撃実験

実験の実施

本年1月11日、中国は、国境内において地上配備型のミッドコースにおけるミサイル迎撃技術実験を実施。

◇ 国営新華社報道(1月11日付)

「中国は11日、国境内において地上配備型のミッドコースにおけるミサイル迎撃技術実験を実施し、**所期の目的を達成した**。本実験は防御的なものであり、如何なる国家に向けられたものでもない。」(新華網)

《米・露政府関係者の関連発言》

◇ クリントン米 국무長官

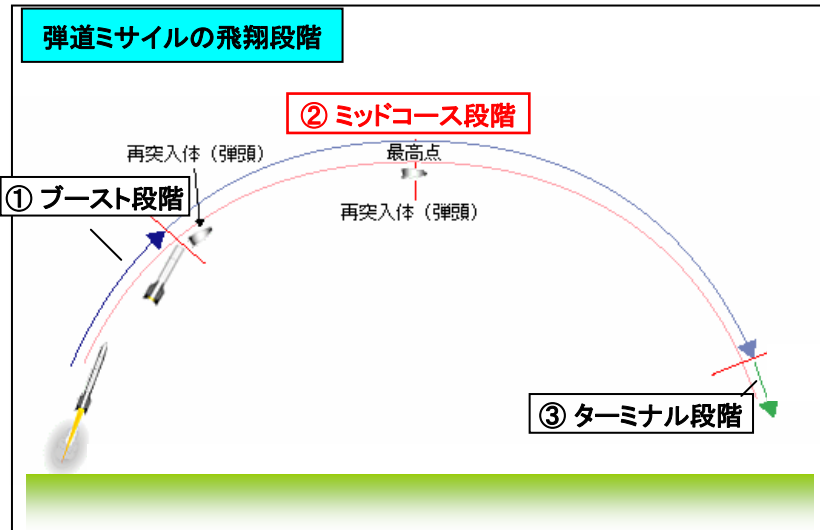
「今回の実験が**他の行動や出来事に関連しているとは思わない**。」
「兆候は**数週間前**(some weeks ago)からあった。」(1月12日記者会見)

◇ ウィラード米太平洋軍司令官

(中国のミサイル防衛能力の進展具合について質問され、)「(前略)その点は、**ごく最近のミサイル同士の交戦**(missile-to-missile engagement)に関して、まさに調査すべき対象である。」(1月13日下院軍事委員会公聴会)

◇ オスタペンコ露宇宙軍司令官

「中国から通報はなかったが、**我々はその活動を観測した**(we did see that work)。」(1月14日付インターファックス通信)



中国政府の発表

◇ 中国外務省報道官(1月12日)

(上記新華社報道と同様の内容に加えて)

- ・「本実験は宇宙軌道上に漂う**デブリを発生させるものではなく**、軌道上の宇宙飛行体の安全に脅威を与えることもない」
- ・「中国が一貫して遂行してきた防御的な国防政策と一致するものである。中国の**ミサイル防衛問題における立場に変更はない**」

《ミサイル防衛についての従来の中国の立場》

中国はグローバルなミサイル防衛計画は戦略バランスと安定を損ない、国際及び地域の安全保障にとってマイナスとなり、核軍縮の進展にもマイナスの影響を与えるにちがいないと考えている。これに対し、中国は非常に注目している。

(「2008年中国の国防」)

我が国近海などにおける活動の例

1999-2004年
中国海洋調査船による海洋調査活動

2008年10月
ソブレメンヌイ級駆逐艦等4隻が津軽海峡を通過(中国海軍戦闘艦艇として初)後、我が国を周回

2009年6月
ルージョウ級駆逐艦等5隻が南西諸島を通過し、沖ノ鳥島の北東260km付近の海域に進出

2008年11月
ルージョウ級駆逐艦等4隻が沖縄本島と宮古島の間を抜けて太平洋に進出

2010年3月
ルージョウ級駆逐艦等6隻が沖縄本島と宮古島の間を抜けて太平洋に進出

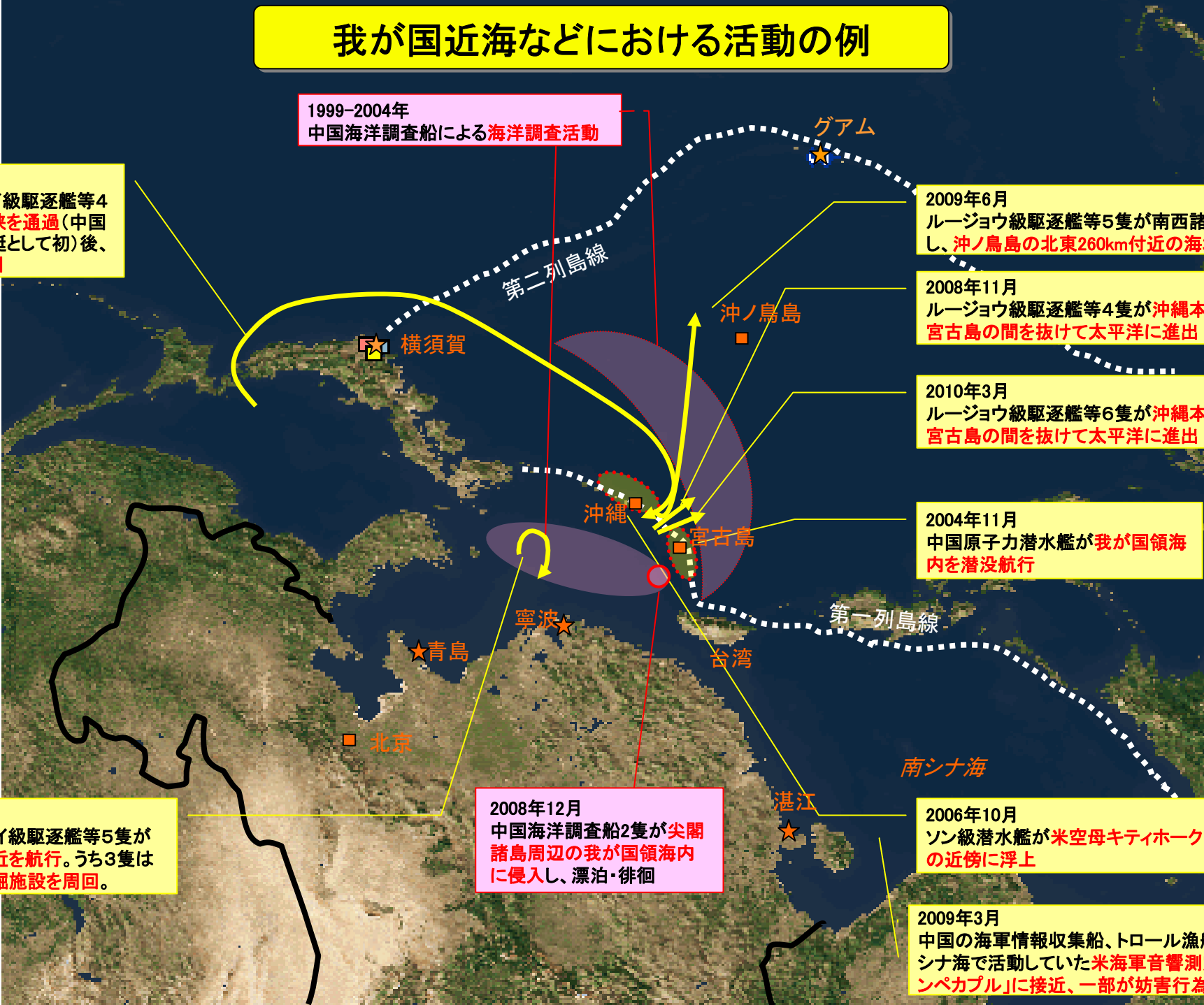
2004年11月
中国原子力潜水艦が我が国領海内を潜没航行

2005年9月
ソブレメンヌイ級駆逐艦等5隻が樫ガス田付近を航行。うち3隻は同ガス田採掘施設を周回。

2008年12月
中国海洋調査船2隻が尖閣諸島周辺の我が国領海内に侵入し、漂泊・徘徊

2006年10月
ソン級潜水艦が米空母キティホークの近傍に浮上

2009年3月
中国の海軍情報収集船、トロール漁船等が南シナ海で活動していた米海軍音響測定艦「インペカブル」に接近、一部が妨害行為を実施

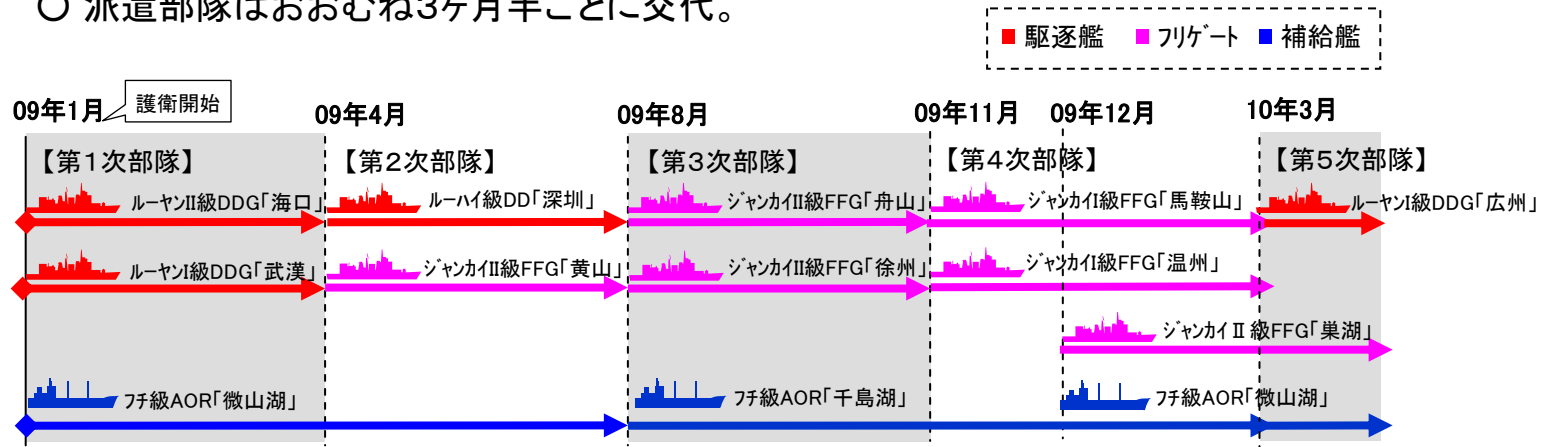


ソマリア周辺海域における船舶護衛活動

◆ 08年12月以降、中国は、ソマリア周辺海域において中国船舶等を護衛するため海軍艦艇を継続的に派遣
 ⇒ **中国海軍として初めての中国近海以遠における任務**

中国艦艇の派遣ローテーション

- **水上戦闘艦艇(駆逐艦/フリゲート) × 2隻以上及び補給艦 × 1隻を常時ソマリア周辺海域に展開。**
- 派遣部隊はおおむね3ヶ月半ごとに交代。



第5次派遣部隊の編成

- 艦艇等：ルンペンII級駆逐艦 × 1隻、
 ジャンカイII級フリゲート × 1隻、
 フチ級補給艦 × 1隻、艦載ヘリ × 2機
- 人員：約800名(特殊作戦要員数十名を含む。)
 (「新華網」による。)



中国海軍創設60周年に際してのインタビューにおける呉勝利海軍司令員の発言

「中国海軍は、非戦争軍事行動能力の建設を海軍近代化建設と軍事闘争準備の全局に組み入れ、**外洋機動能力と戦略的投射能力を海軍の軍事能力建設体系に組み入れ**、海上応急搜索救難等の非戦争軍事行動に係る専門的な能力向上を海軍力建設の全体に組み入れ、科学的に計画し、実施する。」

(09年4月15日「中国軍網」)

中国の軍事力及び海洋における活動に対する評価

(平成21年版防衛白書に基づく。)

軍事力

- 中国は世界の軍事発展の趨勢に対応し、軍事力の**機械化および情報化**を主な内容とする「中国の特色ある軍事変革」を積極的に推進する方針をとっている。
- 中国は、軍事や戦争に関して、物理的手段のみならず、**非物理的手段も重視**しているとみられ、「三戦」と呼ばれる「輿論戦」、「心理戦」および「法律戦」を軍の政治工作の項目に加えたほか、「軍事闘争を政治、外交、経済、文化、法律などの分野の闘争と密接に呼応させる」方針も掲げている。
- 軍事力近代化においては台湾問題への対処、具体的には**台湾の独立および外国軍隊による台湾の支援を阻止する能力の向上が、最優先の課題**として念頭に置かれていると考えられる。さらに、近年では、**台湾問題への対処以外の任務のための能力獲得にも取り組み始めている**。
- 中国は**経済建設に支障のない範囲**で国防力の向上のための資源投入を継続していくものと考えられる。
- 長期的には**国力の向上に伴い軍事力も発展させていく**考えであるとみられる。
- 軍事力の近代化の**具体的な将来像は明確にされていない**。このような観点から、中国の軍事力が地域情勢やわが国の安全保障にいかなる影響を与えていくのかが懸念されるところであり、慎重に分析していく必要がある。

海洋における活動

- 近年、中国は、**海洋における活動を活発化**させている。
- 中国海軍などの海洋における活動には、次のような目標があるものと考えられる。
 - ・ **中国の領土・領海を防衛**するための可能な限り遠方の海域での敵作戦の阻止
 - ・ **台湾独立を抑止・阻止**するための軍事的能力の整備
 - ・ **海洋権益の獲得、維持および保護**
 - ・ **自国の海上輸送路の保護**

中国の軍事力の現状と将来に対する各国の見方

米国防省「中国の軍事力に関する年次報告」(09年3月)

- 中国軍は、**軍種間協力や統合演習・統合作戦の実経験不足**に直面。かかる欠点を踏まえ、軍指導部は、対宇宙やサイバー戦を含む、敵の弱点を突く**非対称戦略**を重視。
- **遠隔地で兵力を維持する能力**はいまだ限定的だが、**核・宇宙・サイバー戦**の能力に加え、**接近阻止/領域拒否**を含む混乱型 (disruptive) の軍事技術を開発・配備。
- 短期的には、**台湾による法的独立の追求を抑止するための威圧能力**を急速に発展。この能力は、将来、紛争時の**米国による台湾支援を抑止・遅延・拒否**しつつ、中台間の問題を**大陸有利な条件で解決するよう圧力**をかけることにも利用可能。
- **台湾を超えて影響を及ぼしうる、より遠方での作戦能力** (longer range capabilities) も発展させつつある。かかる能力の一部は、中国が平和維持、人道支援・災害救援、海賊対策などで**国際社会に貢献**することに寄与すると同時に、**天然資源へのアクセス確保**や**係争地域に対する主権の主張**を実行するための**戦力投射**を可能にする。
- この数年中国の軍事的発展は**新たな段階**を開始。直近の領土問題への関心を超えた、**軍の新たな役割・任務**について言及し始めた。

豪国防省「アジア太平洋の世紀における豪州の防衛:2030年の軍」(09年5月)

- 中国は、**アジアで圧倒的に最強の軍事力**を保有するだろう。
- 中国の軍事力近代化は、**戦力投射能力の向上**という特徴を一層強めていくだろう。
- 大国としての地位ゆえに、中国がその規模にふさわしいグローバルな重要性をもつ軍事力を発展させる可能性が高い。

台湾国防部「国防報告書」(09年10月)

- 台湾への圧力を強化するため、近年中国軍は**統合作戦**および台湾に焦点を当てた**実動対抗演習**を大幅に強化した。
- 中国軍は近年ハイテク化を推進し、各種のプラットフォームおよび精密攻撃兵器を研究・調達。これは、突発事態や台湾海峡での危機発生時に**外国軍隊の介入を遅延・抑止**できることを目指すもの。
- **抑止、核、宇宙**および**情報戦**能力を着実に発展させており、その**軍事力の影響範囲を拡大**させ続けている。
- 中国の真の目的は、**第一列島線および第二列島線の完全掌握、インド洋海域への戦力投射、台湾本島の迅速な占領**が可能な軍事能力を獲得し、**アジア太平洋地域の軍事強国**になること。
- **平時と戦時の兵力配備の同一化**や**従来 of 活動領域を超えた領域での活動**の実施などの戦略・方法により、「**例外的行為**を通じて、**慣例**を作り上げ、それを**常態化**させ(経路例外、造成慣例、形成常態)」、台湾軍の警戒意識を麻痺させ、現在の中台両軍の相互行動のモデルを曖昧化し、**国際社会がそのような中台の対峙状況の変化を黙忍・受容**せざるを得なくなることを企図している。